

## 民間テニスクラブにおける ジュニア育成に関する研究（Ⅰ）

——“クラブ育ち”と“運動部育ち”の

テニスとのかかわり合いの違いについて——

黒 須 充

### A Study of Junior Class in Commercialized Tennis Club (I)

—— Difference in Tennis Involvement

between Commercialized Club and School Club ——

Mitsuru KUROSU

#### はじめに

昭和40年代後半のテニスブームを背景に相次いで建設された民間のテニスクラブは、現在なおも増え続け、業界専門紙<sup>1)</sup>によれば、全国のクラブ数は1,500を超えともいわれている。

こうした中で、最近ジュニアの育成（選手養成）に力を入れるクラブが増えており、そうした民間クラブ出身の選手、いわゆる“クラブ育ち”の選手が、各種ジュニアの大会で上位を占めるようになってきている。

早い時期にテニスとの出会いの機会を設け、多くの素質ある選手を発掘するという点（底辺の拡大ならびにレベルアップ）で、民間テニスクラブの果たす役割は大きく、今後とも、ますます期待されるであろう。ただしその半面、強いジュニアを輩出することがクラブの名声を高める一つの方法でもあり、常に勝つことにウエイトを置いた指導、いわゆる『企業の論理』を優先した指導がなされているのも事実のようである。

青少年期において何が最も重要かと問われれば、それが心身の健全な発達であ

ることに間違いはなく、誰もが認めるところであろう。しかし得てして、『企業の論理』が優先されると、つまり、あまりに技術の向上が優先されると、「心身の健全な発達」といった『教育の論理』がなおざりにされたりするものである。ただし、『教育の論理』を重視すればそれでいいのか、といえそうともいえず、教育の枠にとらわれ、なかなか「競技力の向上」には結びつかない、といった声もよく聞かれることである。

どちらか一方を重視すると、片一方がなおざりになるといったシーソーのような関係は、こと民間テニスクラブだけの問題とはいえず、スポーツ一般の選手養成にもよくあてはまることである。「競技力の向上」か「心身の健全な発達」かといった論議はこれまでも数多くなされており、いまだバランスのとれた良い方法を提示するまでには至っていないのが現状といえよう。

ましてや、これまでの選手養成が、主に学校を中心に行われてきた経過もあり、「民間クラブにおけるジュニア育成」に関しては、まだまだ未解決の問題を多く残しているといえる。

しかし、今後、様々なスポーツ<sup>2)</sup>において、選手養成の基盤が学校運動部から、民間クラブへと移行しつつあることは確かなことであり、ここで、民間テニスクラブを例にとり、ジュニア育成の問題を明らかにしておくことは、きわめて現実的課題に応えるものと思われる。

そこで本研究は、「民間テニスクラブにおけるジュニア育成に関する研究」(I)として、高校生のなかでもトップレベルにある“クラブ育ち”の選手(インターハイ出場者)に着目し、彼らがどのような社会的条件の中で、テニスとかかわり合ってきたかを明らかにすることを試みた。

## 研究の目的

“クラブ育ち”の選手がどのようにテニスとかかわり合ってきたかを明らかにするため、ここでは、“運動部育ち”の選手との対比の中で、(1)個人的属性、(2)過去のテニス経験、(3)現在の学校運動部活動に対する意識、(4)両親、兄弟姉妹のテニス経験について順次考察を加えた。

また、ここで“クラブ育ち”とは、「民間テニスクラブに所属したことがあるかどうか」といった質問に対し、「以前に所属していた」、または「現在も所属している」と答えた選手を指し、“運動部育ち”とは、「所属したことがない」と答えた選手を指す。

## 研究の方法

調査は、第76回全国高等学校庭球選手権大会（インターハイ）の団体戦に出場した412名を対象に、質問紙法を用いて、昭和61年8月に実施した。有効回収標本数（率）は、260（63.1％）であった。調査票は、試合前日の監督会議の席で、各代表校の監督に自校の選手への配布を依頼し、回答後は、選手各自が同時配布の返信用封筒により、返送するという方法をとった。

## 結果と考察

### (1) 対象者の特性

表1から、インターハイ団体戦に出場した選手260名の中で、“クラブ育ち”の選手は93名であり、全体の35.8％の割合を占めることがわかる。

次に、“クラブ育ち”の選手に民間テニスクラブへの所属期間、かかわり方、また、現在の主な練習場所について聞いてみた。結果を図1～図3に示す。

所属期間は、「5年以上」（35.5％）が一番多く、次いで「1年から3年未満」（30.2％）、「3年から5年未満」（23.7％）、「1年未満」（10.8％）の順になっている。

この結果から、“クラブ育ち”はかなり早くからテニスとかかわり合っていることがわかる。かかわり方は、会員やスクール生がほとんどで、おそらくジュニアクラスにおいてテニスクラブのコーチからレッスンを受けているものと思われる。

表1. 標 本

分類 \ 性別	男 子	女 子	標 本 数
クラブ育ち	54 (58.1)	39 (41.9)	93 ( 35.8)
運動部育ち	70 (41.9)	97 (58.1)	167 ( 64.2)
合 計	124 (47.7)	136 (52.3)	260 (100.0)

( ) は%

また、「現在の練習は主にどこで行っているか」の質問に対し、「主に民間クラブ」と答えたものが15.3%、「民間クラブと学校運動部のかけもちである」と答えたものが42.3%と、半数以上のもが、学校運動部に所属している現在もなお、民間クラブとのかかわりをもっていることがわかる。高体連主催の大会へ出場するためには、学校運動部へ所属することが必須条件であることから、実際は民間クラブで活動を行ってしながら、籍だけは学校運動部においているといった選手がいるものと思われる。これは、「それぞれの学校運動部で培った技量を競い合う」といった趣旨をもつ高体連主催の大会に、一石を投げかける結果とはいえないだろうか。

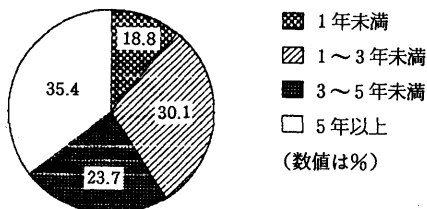


図1 所属期間

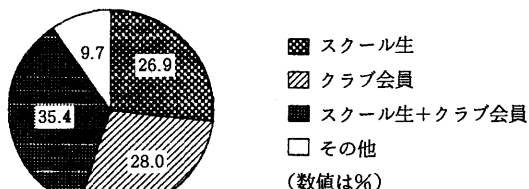


図2 かかわり方

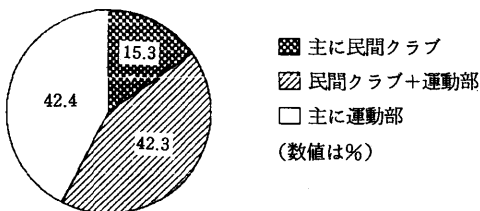


図3 現在の練習場所

では、次に“クラブ育ち”の選手がどのようにテニスとかかわり合ってきたかを、以下“運動部育ち”の選手と比較する中で見ていくことにする。

#### ① 学年

調査対象は前述したように、団体戦に選手として出場したものであり、この学年という項目は、すなわち、選手として出場する学年を意味する。図4より、“クラブ育ち”と“運動部育ち”に選手として出場する学年に有意な違いがみられる。 $(X^2 = 28.7, df = 2, P < 0.01)$ つまり、“クラブ育ち”の約半数(49.5%)は、1、2年生で選手として出場しているのに対し、“運動部育ち”の大部分(79.0%)は3年生で出場している。

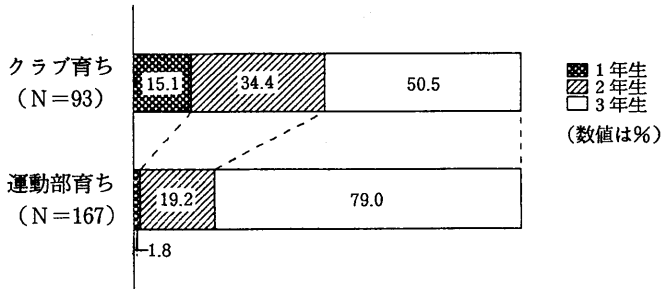


図4 学 年

これは、おそらく経験年数の違いによるものと思われる。図5に示すように、“クラブ育ち”と“運動部育ち”の経験年数に有意な違いがみられる。 $(X^2 = 121.1, df = 3, P < 0.01)$  参考までに、それぞれのグループの平均値を算出してみると“クラブ育ち”の経験年数は4年8ヶ月であるのに対し、“運動部育ち”の経験年数は2年3ヶ月に過ぎない。

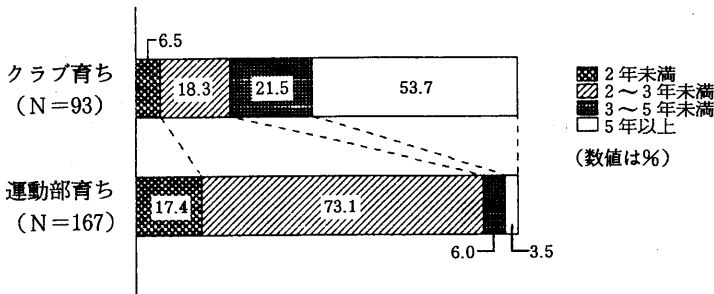


図5 経験年数 (テニス歴)

## ② 公立高校と私立高校

図6より、“クラブ育ち”と“運動部育ち”に公立高校か私立高校かといった点で有意な違いがみられる。 $(X^2 = 32.8, df = 1, P < 0.01)$  “クラブ育ち”の69.9%が私立高校、“運動部育ち”の67.1%が公立高校と両者は好対照を示している。つまり、“クラブ育ち”に私立高校の占める割合が高く、これは、“クラブ育ち”のものが、いわゆるスポーツ名門校に集まる傾向にあるとはいえないか。スポーツ名門校とは、スポーツ活動を重視し、スポーツで好成績をあげるこ

とを学校の経営方針とする学校であり、強い選手を入学させたいと考える学校サイドと、強い学校に入りたいとの考えをもつ“クラブ育ち”の選手とのお互いの意向が合致した結果の表れではないかと推測される。

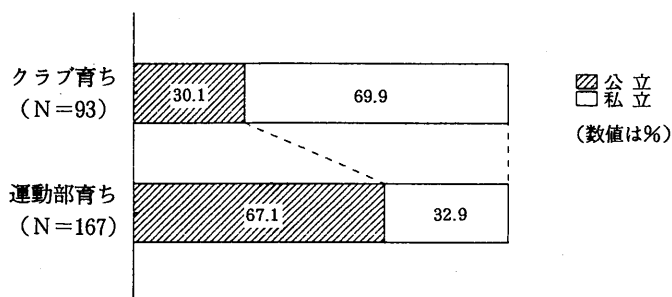


図6 公立高校と私立高校

### ③ 戦績別

ここでは、戦績を初戦敗退、1回勝ち、2回勝ち、3回以上勝ちの4つに区分し、“クラブ育ち”と“運動部育ち”それぞれの戦績を比較した。図7より、“クラブ育ち”と“運動部育ち”に有意な違いがみられる。 $(X^2 = 31.2, df = 3, P < 0.01)$  “クラブ育ち”の69.8%が初戦突破しているのに対し、“運動部育ち”は、47.0%である。つまり、“クラブ育ち”の選手を多く抱えている学校ほど、上位に進出しているものと思われる。

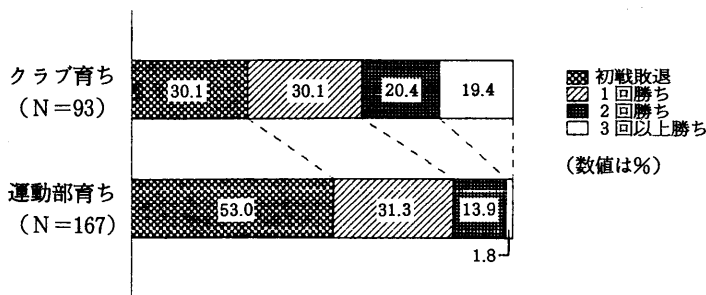


図7 戦績別

## (2) 過去のテニス経験

### ① 始めた時期、および始めた場所

前述の経験年数の違いからほぼ察しがつくように、“クラブ育ち”は、“運動部育ち”よりも、早い時期にテニスとのかかわりをもつ。“クラブ育ち”の47.3%が小学校時から、25.8%が中学校時から始めているのに対し、“運動部育ち”の大部分(91.6%)は高校から始めている。このように、両者の開始時期には大きな違いがみられる。また、改めて述べるまでもなく、始めた場所は、“クラブ育ち”は、「民間のテニスクラブ」(67.2%)であり、“運動部育ち”は、「学校」(97.0%)になっている。

### ② 重要な他者

ここで重要な他者とは、テニスを始めようとした時に最も強く影響を受けた人を指す。図8より、“クラブ育ち”と“運動部育ち”では、それぞれの重要な他者に有意な違いがみられる。 $(X^2 = 52.3, df = 6, P < 0.01)$  “クラブ育ち”で一番高い割合を示すのが「両親」(34.4%)であり、次いで「友人・先輩」、「兄弟姉妹」、「民間クラブのコーチ」の順である。“運動部育ち”で一番高い割合を示すのが「友人・先輩」(32.3%)であり、次いで「兄弟姉妹」、「両親」、「学校の先生」の順である。テニスとのかかわり合いにおいて、“クラブ育ち”では両親が、“運動部育ち”では友人・先輩が重要な役割を果たしていることがわかる。また、影響者が誰もいないとする層も“クラブ育ち”に23.7%、“運動部育ち”に28.7%いる。

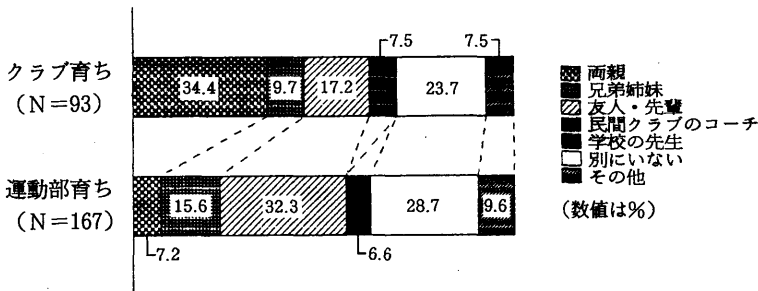


図8 重要な他者

## ③ 始めたきっかけ

表2から、“クラブ育ち”と“運動部育ち”に違いのみられる項目を拾いだし、してみると、“クラブ育ち”に、「両親から勧められて」(46.2%)、「テニスコートが近くにあったので」(26.9%)といった他人から誘発されたきっかけが多く、

表2. 始めたきっかけ

項 目	分 類	クラブ育ち (N= 93)	運動部育ち (N=167)
1. 両親から勧められて		46.2	13.3
2. 友人から勧められて		8.6	18.0
3. 学校の先生から勧められて		2.2	16.2
4. テニスクラブのコーチから勧められて		8.6	2.4
5. 服装やテニススタイルにあこがれて		7.5	5.4
6. テレビでテニスの試合をみて		22.6	28.7
7. 新聞、雑誌などでテニスの記事を読んで		10.8	13.2
8. 家族または身近な人がテニスをしていたので		37.6	30.5
9. 友人がテニスをしていたので		5.4	8.4
10. テニスの練習や試合風景を直接に見て		15.1	20.4
11. テニスコートが近くにあったので		26.9	1.8
12. 自分の運動能力がテニス向きだと思ったので		9.7	24.0
13. ただなんとなく		23.7	21.0
14. その他		7.6	12.2

数値は% ただし重複回答のため合計は100%を超える

“運動部育ち”に、「自分の運動能力がテニス向きだと思ったので」(24.0%)、「テニスの練習や試合風景を直接に見て」(20.4%)といった自発的なきっかけが多いことがわかる。これは、“運動部育ち”の自己判断的なテニスとのかかわりに対し、“クラブ育ち”は、他者誘発的にテニスとかかわり合ったものとの解釈が可能であろう。また、「家族または身近な人がテニスをしていたので」、「テレビでテニスの試合をみて」等は、両者に共通するものである。

## (3) 現在の学校運動部活動について

図9～図14は、調査対象校の練習日数(週)、練習時間(平日)、コート数、部員数(男女別)、顧問教師の担当教科、顧問教師のテニス歴についてみたものである。

これらは、ほぼインターハイ出場校の実態を表すものといえるが、本研究の考察とは直接関係しないため、ここでは図の掲載だけにとどめたい。参考までに、平均値を算出してみると、1日の練習時間量は、3時間01分、コート数は2.7面、部員数は、24.8人である。



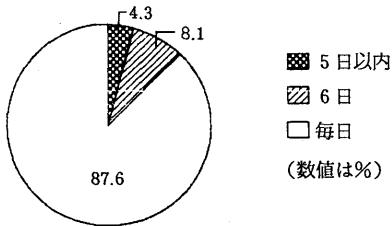


図 9 練習日数 (週)

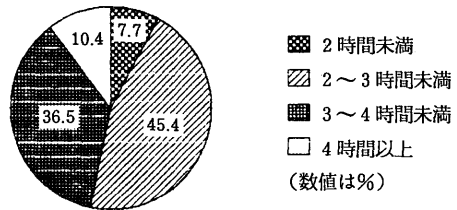


図 10 練習時間 (平日)

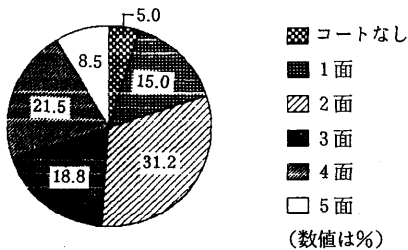


図 11 コート数

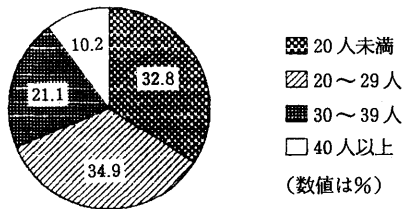


図 12 部員数 (男女別)

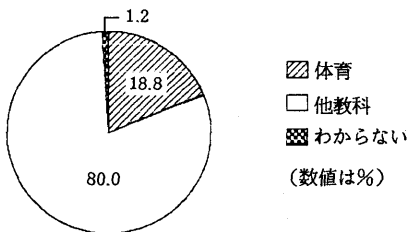


図 13 顧問教師の担当教科

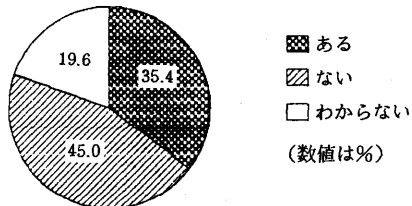


図 14 顧問教師のテニス歴

## ① 本大会へ出場できた理由

図 15 から、インターハイへ出場できた理由において、“クラブ育ち”と“運動部育ち”に有意な違いがみられる。 $(X^2 = 31.8, df = 5, P < 0.01)$  “クラブ育ち”で一番高い割合を示したのが「自分自身の努力」(43.0%)で、次いで「部員一人一人の力」、「指導者の力」、「練習量」、「伝統の力」の順である。それに対し、“運動部育ち”で一番高い割合を示したのが「部員一人一人の力」(34.7%)で、次いで「指導者の力」、「練習量」、「自分自身の努力」、「伝統の力」の順である。

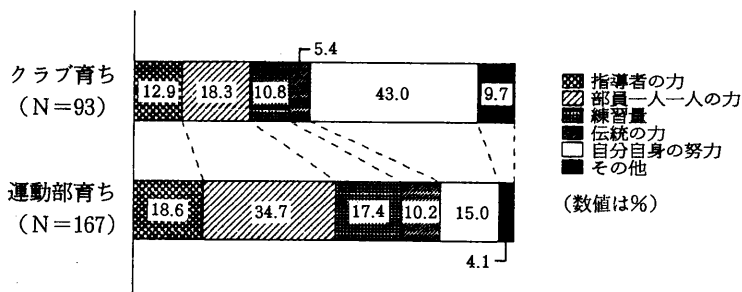


図15 インターハイへ出場できた理由

“クラブ育ち”に「自分自身の努力」、「運動部育ち」に「部員一人一人の力」と答えたものがかなり高い割合を示していることがわかる。これだけでそれぞれの価値観の問題を論じることはできないが、“クラブ育ち”に個人志向の、また“運動部育ち”に集団志向の価値観が強いことがうかがえよう。

## ② 現在の運動部活動に対する悩み

表3は、“クラブ育ち”と“運動部育ち”の現在の運動部活動に対する悩みについて表したものである。“クラブ育ち”、“運動部育ち”とも最も高い割合を示しているのが「技術の伸び悩み」であり、その割合は、“クラブ育ち”の53.8%、“運動部育ち”の61.3%を占める。対象者のほぼ半数以上がこの悩みをもつことから、インターハイ出場選手に強い勝利志向の傾向を読みとることができる。また、両者に共通する悩みとして、「コート不足」、「勉強のこと」、「進学

表3. 学校運動部活動に対する悩み

項 目	分 類	クラブ育ち (N= 93)	運動部育ち (N=167)
1. 技術の伸び悩み		53.8	61.3
2. コート不足		32.3	26.9
3. 指導者不足		37.6	17.4
4. 練習相手不足		26.9	9.6
5. 勉強のこと		35.5	31.1
6. 進学のこと		39.8	37.1
7. 部内での人間関係		18.3	10.8
8. 経済的負担		12.9	26.9
9. 期待の重さ		15.1	8.4
10. 別に悩みはない		7.5	12.6
11. その他		7.5	3.0

数値は% ただし重複回答のため合計は100%を越える

のこと」があげられており、施設・設備の不足、学業との両立のむずかしさをうかがい知ることができよう。両者を比較してみると、“クラブ育ち”に特徴的な悩みには、「練習相手不足」、「期待の重さ」が、“運動部育ち”に特徴的な悩みには、「経済的負担」があげられている。

### ③ 運動部活動に対する満足度

図16は、「部の練習内容」、「部の一人当たりの練習時間量」、「部の施設・設備」、「部内の人間関係」、「顧問の先生の指導」、「部の規則」の6項目についての満足度をたずねた結果を指数値で示したものである。指数値の算出方法は、「満足」に2点、「やや満足」に1点、「どちらともいえない」に0点、「やや不満」に-1点、「不満」に-2点というような等間隔にウェイト値を与えて算出するという方法をとっている。これによると、6項目すべてにおいて、「クラブ育ち」の選手は、「運動部育ち」の選手に比べ満足度が低いことがわかる（t検定の結果、すべての項目に $P < 0.01$  か  $P < 0.05$  で有意な違いがみられた）。特に、不満の値を示している項目は、「部の施設・設備」（-0.38）、「部の練習内容」（-0.36）、「部の一人当たりの練習時間量」（-0.30）である。

施設・設備が完備され、また、ある程度は自由に、そして思う存分練習のできる民間クラブに対し、学校運動部は、何かと制約も多く、拘束される面をもつことは否めない。それに加えて、学校運動部は、前述したように部員数24.8人に対し、コート数が2.7面と個人の練習が制限されることも容易に推測できる。“クラブ育ち”の選手は、こうした点を、民間クラブと比較した上で、現在の学校運動部活動への不満を訴えているものと思われる。

ところで、これまででは、学校運動部に対する満足度を6つの側面から別々に考察してきたが、次に、部活動全般に対する満足度を測定する尺度が存在するかどうかの検討を試みた。

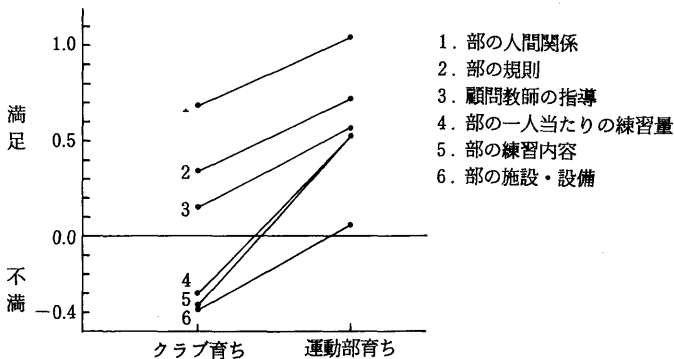


図16 学校運動部に対する満足度

その方法として、6項目の項目間相関行列に主成分分析を行ったところ、表4に示されるような結果をえた。

表4. 満足度の主因子解

項目	I	II	$h^2$
1	0.779	-0.114	0.620
2	0.674	-0.311	0.551
3	0.353	-0.325	0.230
4	0.531	0.185	0.316
5	0.672	0.011	0.452
6	0.618	0.498	0.630
固有値	2.154	0.302	2.456
貢献度(%)	35.9	5.0	40.9

1.0以上の固有値を示した因子が一つだけ抽出され、その全分散に対する貢献度は、35.9%であった。そして、6項目すべてに高い正の相関を示していることから、これを、全項目に共通する領域としての、つまり、運動部活動に対する満足度を示す一般因子と解釈することができる。そして、この一般因子に対する各個人の因子スコアをもとに対象者を、「満足派：135人」（因子スコアが+のもの）、と「不満派：125人」（因子スコアが-のもの）の2つのグループに分類した。

#### ④ 運動部活動に対する満足度を規定する要因について

ここでは、「満足派」と「不満派」の2つのグループを外的基準とし、多変量解析の一つである林の数量化理論第Ⅱ類を行った。これは、「満足派」と「不満派」の弁別の手掛かりとして、何が重要な要因となっているかを判定しようとするものである。「説明変数」としては、「性」、「学年」、「公立と私立」、「開始時期」、「民間クラブへの所属」、「練習日数」、「練習時間量」、「コート数」、「部員数」、「顧問教師の担当教科」、「顧問教師のテニス歴」の11項目をとりあげた。つまり、これらの説明変数が、それぞれ複雑にからみあって、運動部活動に対する満足度を高めたり、または低めたりするものと仮定したわけである。表5に分析の結果を示す。

表5. 要因分析結果

アイテム	偏相関係数	カテゴリー	スコア	レンジ (順位)
① 性別	0.16303	男子 女子	-0.23815 0.21714	0.45529 (9)
② 学年	0.12276	1年 2年 3年	0.82628 0.21754 -0.15625	0.98253 (3)
③ 公立/私立	0.11976	公立 私立	0.25240 -0.29446	0.54686 (8)
④ 開始時期	0.06049	小学校 中学校 高 校	-0.29755 0.15204 0.04614	0.44959 (10)
⑤ 民間クラブ への所属	0.24730	以前に所属 現在も所属 所属せず	0.65851 1.05582 -0.49757	1.55339 (1)
⑥ 練習日数	0.11808	6日以内 毎 日	0.67881 -0.09527	0.77408 (4)
⑦ 練習時間	0.17488	2時間未満 2～3未満 3～4未満 4時間以上	0.10264 0.24899 -0.02525 -0.95759	1.20668 (2)
⑧ コート数	0.12141	1 面 2 面 3 面 4 面 5面以上	0.00840 0.35015 -0.28679 -0.16495 -0.26043	0.63895 (5)
⑨ 部員数	0.12165	20人未満 20～29人 30～39人 40人以上	-0.14953 0.29048 -0.33039 0.25000	0.62087 (6)
⑩ 顧問教師の 担当教科	0.10332	体 育 他教科	-0.47901 0.11124	0.59024 (7)
⑪ 顧問教師の テニス歴	0.03631	あ る な い わからない	0.10286 -0.07897 -0.00439	0.18184 (11)

「説明変数」として取り上げたそれぞれの要因が、「満足派」と「不満派」の2つのグループを区別するのにどの程度寄与しているかは、偏相関係数とレンジの大きさに判定することができる。表5から、「民間クラブへの所属」が最大の

レンジを示しており、次いで、「練習時間」、「学年」、「練習日数」、「コート数」、「部員数」、「顧問教師の担当教科」、「公立 or 私立」、「性別」、「開始時期」、「顧問教師のテニス歴」の順になっている。これは、民間クラブでの経験の有無が、「満足派」と「不満派」の2つのグループを最も強く弁別することに寄与しているといえよう。つまり、民間クラブに「以前に所属していた」、「現在も所属している」と答えた者が不満の方へ、「所属したことがない」と答えた者が満足の方に作用しており、クラブ経験をもつことが、運動部活動への不満に大きな影響を及ぼしていることが理解できるだろう。2位以下の説明は省略するが、要約すれば、民間クラブに所属した経験があり、練習時間が3時間未満、コート数が2面以下の1、2年生に不満を訴える者が多いことがわかる。

#### (4) 両親、兄弟姉妹のテニス経験

図17、図18より、“クラブ育ち”と“運動部育ち”に、両親のテニス経験において、有意な違いがみられる。(父親： $X^2 = 47.8$ ,  $df = 3$ ,  $P < 0.01$ 、母親： $X^2 = 68.2$ ,  $df = 3$ ,  $P < 0.01$ ) まず、父親の場合をみてみよう。“クラブ育ち”の父親の52.8%（「前にしていた」、「現在も行っている」の項目を含む）がテニス経験をもつのに対し、“運動部育ち”では、18.3%にすぎない。同様に母親の場合をみると、“クラブ育ち”の母親の60.2%がテニス経験をもつのに対し、“運動部育ち”では、12.8%にすぎない。このことから、両親のテニス経験が子どもの民間テニスクラブ入会に際し、先有傾向として働いていることがわかる。

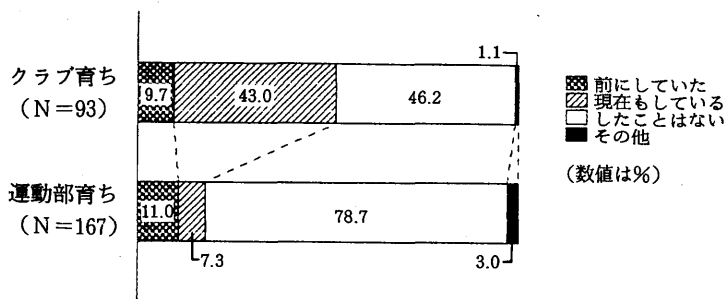


図17 父親のテニス経験

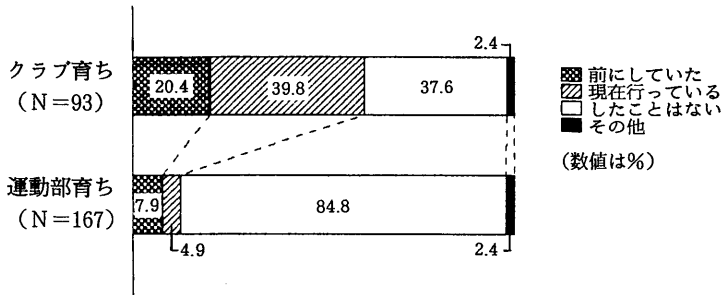


図 18 母親のテニス経験

一方、兄弟姉妹のテニス経験をみたのが、表 6 である。

兄弟姉妹それぞれのテニス経験において、“クラブ育ち”の割合が“運動部育ち”よりも高くなっている。これは、「誰もやっていない」割合が、“運動部育ち”の 50.6% に対し、“クラブ育ち”が 29.2% と低いことでわかる。またここで、「兄弟姉妹はいない」の割合が、“運動部育ち”の 3.7% に対し、“クラブ育ち”は 14.6% であり、“クラブ育ち”に一人っ子の占める割合が高いことが注目されよう。

以上、両親、兄弟姉妹のテニス経験をみてきたわけだが、“クラブ育ち”の選手に“テニスファミリー”の姿を映しだすことができるのではないか。

表 6. 兄弟姉妹のテニス経験

項 目 \ 分 類	クラブ育ち (N= 93)	運動部育ち (N=167)
1. 兄	20.4	18.0
2. 姉	15.1	15.6
3. 弟	11.8	3.6
4. 妹	19.4	10.8
5. 誰もやっていない	30.1	52.1
6. 兄弟姉妹はいない	14.0	3.6

数値は% ただし重複回答のため合計は100%を越える

## ま と め

“クラブ育ち”、“運動部育ち”それぞれのテニスとのかかわり合いを比較検討した結果、次のような結論をえた。

- 1) 1、2年次で選手として出場する割合は、“クラブ育ち”が“運動部育ち”よりも高い。
- 2) 経験年数（テニス歴）の平均は、“クラブ育ち”の4年8ヶ月に対し、“運動部育ち”は2年3ヶ月である。
- 3) “クラブ育ち”に私立高校へ通うものが多い。
- 4) “クラブ育ち”の選手を多く抱えている学校ほど上位へと進出している。
- 5) “クラブ育ち”の重要な他者に「両親」が、“運動部育ち”の重要な他者に「友人・先輩」の占める割合が高い。
- 6) 始めたきっかけは、自己判断的な“運動部育ち”に対し、“クラブ育ち”は他者誘発的である。
- 7) 「インターハイへ出場できた理由」として一番高い割合を示したのが、“クラブ育ち”では「自分自身の努力」、 “運動部育ち”では「部員一人一人の力」であった。
- 8) 学校運動部での悩みは、両者に共通する悩みとして「技術の伸び悩み」、「コート不足」、「勉強、進学のこと」であり、中でも「技術の伸び悩み」は、それぞれの半数以上を占めた。
- 9) “クラブ育ち”の選手に現在の学校運動部への不満を訴えるものが多い。
- 10) 両親、兄弟姉妹のテニス経験とも“クラブ育ち”が“運動部育ち”よりも高い割合を示した。

以上、“クラブ育ち”が、どのような社会的条件の中でテニスとのかかわり合ってきたかが明らかにされた。今後の課題としては、こうしたテニスとのかかわり合いの中で、どのような価値観を抱くようになるかを明らかにすることが必要であろう。

なお本研究は、昭和61年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A、課題番号61780150）の援助を得て行われたものの一部であることを付記しておく。



## &lt; 注 &gt;

- 1) 総合ユニコム刊 テニスクラブ事業年鑑 1985 によれば、民間テニスクラブは、おもに昭和 40 年代後半に相次いで開設され、昭和 54 年～昭和 56 年をピークに急増し、現在は横バイ状態が続いているとのことである。
- 2) 選手養成の基盤が、学校運動部から民間クラブへと移行したものの代表にスイミングクラブを挙げることができる。また、テニスを始め、各種スポーツにおいてもジュニアを対象としたクラブが増えており、特にプロの存在するテニス、プロ選手が誕生したサッカーなどにおいて、今後ますます学校運動部に所属せずに、民間クラブでの活動を選択する人が、増えてくるものと思われる。

## &lt; 参考文献 &gt;

1. 江刺正吾、学生の生活とスポーツ、道和書院、1980.
2. スポーツ社会学国際調査委員会編、一流競技者のスポーツへの社会化に関する調査研究報告、道和書院、1981.
3. 安本美典・本多正久、因子分析法、培風館、1981.

(昭和 61 年 10 月 31 日受理)